

# ESSAY

## 政治思想や宗教を超えて愛される エリザベスII世の魅力

中野香織 (服飾史家/作家)



Mattia Secchi / Alamy Stock Photo



PA Images / Alamy Stock Photo

エ

リザベスII世の在位70年間に、多くの植民地が独立して、イギリスという国家は縮小し、国際社会における地位も変わりました。君主制も危機にさらされるという時代のなかにあつて、エリザベス女王は、変化への柔軟な寛容さと、次世代に継承すべき伝統や品格といった世界遺産級の価値を、不動の安定感をもって体現し続けてきました。

一貫した安定の印象を与えている理由の一つが、エリザベス女王の装いです。ありとあらゆる色を着用しているのにシルエットが不変で、「あそこに女王がいる」とすぐにわかるスタイルであることは、みなさまもお気づきでしょう。

女王が「芝居の小道具」と呼ぶ、装いによる印象戦略がここにありますが、1950年代には当時の流行型であるフープスカートのドレスを着用していますが、60年代以降は、トレンドがどうであろうと、昼間の公務には、コートドレスを基本とした原色のセットアップを貫いています。頭部にはドレスとお揃いの色のファシネーター(頭飾)や帽子、バッグ(ブランドはローナー)と靴はほぼ黒、たまに白で、左胸にバッグをかけ、3連パールネックレスで仕上げるのが女王流です。

ワンススタイル、マルチシェード(スタイルはひとつ、色は多数)というエリザベス・スタイルです。ご自身で傘をさす場合は、フルトンのバードケージがお目見えします。鳥かご型のビニール傘で、縁取りと持ち手がドレスの色とお揃いになっています。ビニール傘はご自身の姿を国民に見せるための配慮です。一つのポリシーのもとに多彩なバリエーションを展開する。このようにして「変化と継続」を安定した印象のもとに象徴しているのです。

さらに、ロイヤルウォッチャーを飽きさせない工夫もあります。女王は、場に応じてブローチを付け替えますが、ブローチは、政治的な意見を公言できない立場にある女王に代わり、強いメッセージを発しています。とりわけ2018年のトランプ大統領との3日間にわたる会見のときにつけられた3種類のブローチに関しては、ほぼ全世界がツイッターで「女王陛下のスパイ」気分で解読ゲームに熱中しました。人々にそのような行動をとらせるとは、さすが「007」の国の女王陛下です。

儀式のときの「小道具」となれば、さらに意味まみれです。たとえば1953年の戴冠式で着用されたドレス、従来のドキュメンタリーではモノクロでしか見られませんでした。テクノロジーのおかげで、カラーで再現されています。金の装飾、銀の糸がきらめく白のドレス、宝石が光り輝く大英帝国王冠は鳥肌が立つほど迫力があります。

この時、エリザベス女王が着用していたドレスには、連邦を構成する国の植物が刺繍されていました。イングランドの薔薇、スコットランドのあざみ、アイルランドのクローバー、カナダのメープル、インドの蓮……。自らを連邦の「結合の要」とみなし、自身の戴冠式を「英国との結婚」と考えた女王自身のアイデアでした。デザイナーのノーマン・ハートネルがその意を汲み取って刺繍を施しました。この伝統は、キャサリン妃やメーガン・マークルのウェディングドレスにも継承されました。

メーガン&ハリー王子の反乱があろうと何があろうと英国女王としての威厳と品格を示し続け、いまや世界の女王にして全人類の母といった貫禄で私たちを魅了するエリザベス2世。ロジャー・ミッシェル監督がこまやかな愛を注いでポップに作り上げたこのドキュメンタリーが見せるのは、雲上の半神のような英国女王像ではありません。たまたま「英国女王」になってしまった一人の女性が、運命を受け入れ、できることを精一杯やり、その役割の質を高めることに日々、努力を惜しみなく続けているというヒューマンな英国女王像です。その心の姿勢にこそ、原理や政治思想、さらには宗教すら超えて、全人類からの敬意を受けるエリザベスII世の真の偉大さがあるということに、私たちは気づくのです。

なかの・かおり/株式会社Kaori Nakano総合研究所代表取締役、英国の文化・王室、ダンディズム、ファッション史、ラグジュアリービジネスに関する執筆・講演、企業の顧問、経産省ファッション未来委員会委員、日本経済新聞、Forbes JAPAN、LEONなど多媒体で記事を執筆、著書は「新・ラグジュアリー 文化が生み出す経済10の講義」(共著、カリスメディア・パブリッシング)、「イノベーター」で読むアパレル全史」(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(新潮社文庫)ほか多数、東京大学大学院修了、英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授を歴任。 HP: www.kaori-nakano.com